

Brudeid – 作品資料

目次

コラム	...	P.1-3
用語解説	...	P.4-5
キャラクター解説	...	P.6-13
年表	...	P.14-15

【タイトルについて】

本作タイトル【Brudeid】はドイツ語の「Bruder（兄弟）」と「Eid（誓い）」を組み合わせた造語。作中に度々出てくるワード「兄弟の誓い」からとっています。

また、サブタイトルである「誓の黙示録」は、「黙示」にはギリシャ語で「覆いを取り去る」「隠されていたものが明らかにされる」という意味があることより、「隠されていた各々の誓い（＝この物語における真相）が明かされる」、という意味合いで設定しました。

「黙示録」と言えば有名なのが新約聖書に配されている聖典「ヨハネ黙示録」ですが、当作品はこの「ヨハネ黙示録」の内容とは関わりがありません。ただ、ダニエル・ブラックマンの名前は「ヨハネ黙示録」と同じく黙示文学とされている「ダニエル書」からとっています。

【ストーリーについて】

今作品のテーマ兼キーワードは「誓い」「愛」「矛盾」「悪魔」。また、後述するこの作品の関連作『Wanted.』からの引継ぎ兼オマージュとして根本のテーマに「家族愛」を据えています。

作品の執筆にあたり、ドイツの文人ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの代表的な戯曲である『ファウスト』を一部参考にしました。作中で度々登場する「悪魔」はこの『ファウスト』からイメージを得ています。ただし今回は、あくまでも「よく分からないものに翻弄される兄弟」がメインの物語にしたかったため、この「悪魔」に関する説明等は意図的に排除しています。そのため、少々分かり辛く、説明不足だと感じられる部分があるかもしれません。

シナリオを書く際下敷きにしたのが、作中でも登場した「女神アプロディーテーと美少年アドニス」の神話です。作中で少女・ガブリエラが「私も軍神アレースと同じこと（嫉妬で美少年アドニスを殺す）をしようわ」というような発言をしますが、これはガブリエラがメアリやアルベルトとテオドールの母・マーガレットを殺害した理由、またこの作品自体の伏線兼説明となっています。ちなみにメイドのメアリが死んだ後、アルベルトが彼女の部屋に入ると、アネモネの

花が咲いたメアリの死体が転がっていたシーンは、この神話のオマージュです。

また、テーマの一つである「矛盾」に関して。キャラクター達の言動やその結果は多くの矛盾を孕んでいました。ダニエルは「妹・ガブリエラと番になりたい、彼女に置いて逝かれて寂しい、だから彼女を蘇らせた」しかし、「自分の命と引き換え＝いずれ自分は死ぬ」という矛盾。傍にいたくて彼女を生き返らせたが、自分は先に死んでしまう、ガブリエラ曰く「利己的で自己犠牲的。とても自分勝手」な行いです。また、アルベルトは「弟たちを守りたい、彼らに真実を知られたくない」という考えが持っているながらも、そのせいでむしろ彼らを危険な目に合わせていること、また弟たちを大事に思っているのに、肝心の弟たちの気持ちは完全に無視して行動していること。ガブリエラは嫉妬でマーガレットやメアリを殺害するのに、エドガーが「大切な人」だと言ったからと言う理由で、憎かったテオドールを殺害しないことにした矛盾（これは、エドガーのテオドールへの想いが、過去のガブリエラがダニエルに対して抱いていた感情と重なる部分があった、あるいは同じものだったからかもしれません）等々……。

最後に、今作のメイン部分にすえた「翻弄される兄弟」について。今作に登場する兄弟、アルベルト、テオドール、エドガーの三人にはそれぞれ役割があります。アルベルトは「真実を知り、物語を終わらせる」役割。テオドールは「真実を知るために動き、物語を進める」役割。エドガーは「真実そのものであり、物語を始める」役割です。それぞれがこの役割にのっとって行動しています。エドガーという存在がなければこの物語は成立しませんし、テオドールがいなければ物語は展開しません。そしてアルベルトがいなければ物語は結末を迎えられなかった、と考えています。

【『Wanted.』について】

上述したとおり、今作品には関連作……というよりも所謂前作のようなものがあります。それが『Wanted.』という作品です。

『Wanted.』は2008年に公開したボイスドラマ作品で、現在は公開終了しています。

『Wanted.』ストーリーは以下のような感じです↓

——人は誰も心の中に「悪魔」を潜ませている。

主人公の月瀬莉恩（ツキセ リオ）は中学生の頃、母親を突然の自殺で亡くした。

その葬式などで忙しい日々を過ごし、ようやく落ち着いた頃、久方ぶりに父と散歩していた。

そんな時、突然背後から駆け寄ってきた男が父親を突き刺し、殺害する。

怯える莉恩は、その男の身体のマわりに「紫のモヤ」が見えることに気づいた。

……彼女は幼いころから、犯罪者などの悪事を働いた人間のまわりに「紫のモヤ」が見えていた。

目の前の男も、やはり悪人だからモヤが見えるのだろうか？

そう考えていた莉恩の耳に、突然銃声が聞こえる。

そして目の前の男は突然生気が抜けたかのように意識を失って倒れた。

何事かとあたりを見渡すと、現れたのは一人の少年。彼は銃を片手に、莉恩に問うた。

「お前、紫のモヤが見えるのか？」

その日から時が経ち、莉恩は高校生になっていた。

いつものように学校へ行くと、どうやら突然の転校生がきたらしい。

転校生は2人。一人は軟派そうに見える少年、流（リュウ）。

そしてもう一人は、あの日、銃を片手に現れた少年。名前は、稜（リョウ）。

彼らは莉恩に接触してきて、言う。

「お前を連れていきたい場所がある。」と。

莉恩が連れてこられたのは、彼らが所属する「Wanted.」（ウォンテッド）という組織だった。

そのボスである「長井」という男と対峙した彼女は、

・人に憑りついて悪事を働かせる「悪魔」という存在がいること

・「Wanted.」がその「悪魔」を殲滅するためにつくられた組織であること

・そして彼女が幼いころから見えていた紫のモヤは、その人間が「悪魔」に憑りつかれているという証拠であり、更にそれが見えるのは現時点では莉恩だけであること

を知る。

長井は「Wanted.に入らないか？」と彼女を誘う。

莉恩は、「自分が役に立つのなら」とその誘いに乗る。

こうして「Wanted.」に所属することになった莉恩は、メンバーである稜、流、そして瑞樹（ミズキ）、柚樹（ユズキ）という双子の少女たちと共に悪魔を殲滅していくうちに、

自分自身の「真実」を知ることになる……。

『Wanted.』はシリーズもので、上記ストーリーが展開される『悪魔の宴』、そして『悪魔の宴』に登場する流というキャラクターの過去に関わる物語を描いた『眠り姫』という2作品がありました。

この『Wanted.』に登場する「悪魔」は、人間に憑りついて殺人や強姦などの罪を犯させる害悪として描かれているのですが、その「悪魔」は『眠り姫』ストーリー内にて実質活動不可能（という表現が正しいかはわかりませんが）になり、「悪魔」に関わる事件は幕を閉じました。

……が、しかし、その「悪魔」が色々あって再び動き出しました。そして『Brudeid』に繋がります。

『Brudeid』に登場する「悪魔」は、『Wanted.』に登場した「悪魔」の内の1人がとある願いをかなえるため、人間に再び害を為すようになった、という設定があります。

『Wanted.』世界の中での「悪魔」について。まず「悪魔」というのは、そもそも正式名称ではありません。とある男が、その「悪魔」にあたる存在を知った時にそう名付けた、というだけです。「悪魔」は実質不死身で、人間の手で殺すことはできません。唯一の対

抗手段は「Wanted」が使用していた「対悪魔専用の銃」でした。

この「悪魔」はとある女王が統べる「王国」(以下、「悪魔の国」と記載します)に所属していました。悪魔たちのほとんどはただの紫のモヤモヤのような姿で、実体がありません。しかし一部のかなり強い力をもった悪魔(女王など)は人間と同じような姿をしていました。人間と同じ姿をしている悪魔の特徴は、黒い髪と赤い瞳です。特に赤い瞳は悪魔の証であると言ってもよく、力が強ければ強いほどその赤は鮮やかなものになり、逆にあまり力が強くないものは茶色がかった赤になります。

人間と同じ見た目をしている悪魔たちには貴族階級のようなものがあって、王がその頂点、その下に侯爵や伯爵などがいます。人間界の中世と似たような感じでしょうか。紫のモヤモヤでしかない悪魔たちは「下級の悪魔」と呼ばれていました。

「悪魔」たちは人間の命を得ることでその力と命を保っており、そのために人間に憑りついたり、殺害したりしていました。しかしいくら生きるためとはいえ、高貴な存在である人の形をした悪魔に手を汚させるわけにはいけない。そこで、「下級の悪魔」たちに「汚い仕事」をさせていました。

その「下級の悪魔」たちに命令を下す「司令官」のような存在もいます。それは人の形をした悪魔の中でもとりわけ冷酷で、淡々と殺人ができる、あるいは殺人を楽しめるような悪魔でなければならず、その悪魔を選ぶために人間界に行って人間に憑りついて殺人をする、という試験も行われていました。その試験が受けられるのは人の形をした悪魔の中でも比較的階級が低い者たちばかりでした。しかし司令官に選ばれば、階級が低いにも関わらず王宮で暮らせるようになるし、他の悪魔たちからも尊敬される立場になれるので、千載一遇のチャンスだと試験を受ける者たちは数多くいました。

上記のような人の形をした悪魔の中には、人間を殺すことをあまりよく思わない者、好まない者もいました。悪魔の女王セフィアもそうでした。また、人間界には数は多くないものの、悪魔でありながら人間界で人間として暮らしている悪魔もいます。現在、悪魔の国では、「人間界に悪事を働く以外で訪れること」「人間と恋をしたり友情を結んだりすること」は禁じられ

ています。しかし大昔はそのようなルールはありませんでした。そのため、人間界で暮らす悪魔が多少は存在するのです。いつのまにそれを禁じるルールができたのか、それを知る者はいません。

また、人間界で暮らす悪魔の中には、自らすすんで人間界に行ったわけではない者もいます。『眠り姫』のほうに登場する久瀬孝浩(クゼ タカヒロ)というキャラクターがそうでした。彼は本名を「ラルフ」と言い、悪魔の王だったのですが、とある大罪を犯して人間界に追放されました。

(余談ですが、『Brudeid』でのダニエルの行いは、このラルフが人間界で起こしたとある事件のオマージュだったりします。)

また、悪魔と人間のハーフも存在します。ハーフは黒髪であっても瞳の色は赤ではないことが多く、ぱっと見では悪魔の血が流れていることは分かりません。「悪魔」全体の特徴として、見た目が若々しく美しいことがあげられるのですが、ハーフは特にそれが顕著に表れるため、実年齢よりもかなり見た目が若い(あるいは幼い)者が多いです。『Brudeid』のエドガーは、まさにこの悪魔と人間のハーフです。

(またまた余談ですが、『悪魔の宴』に登場するとある悪魔と人間のハーフが「自分の存在こそが罪」というような発言をするのですが、『Brudeid』内でアルベルトが2つ目の鍵を見つけた時の台詞「この家そのものが、罪の象徴ということなんだな」はそのオマージュです。)

更に悪魔について掘り下げていくと、「悪魔の国」を作った「悪魔」の存在が出てきます。その「悪魔」は一人ぼっちで生まれ、その孤独を癒すために仲間を増やしていきました。しかし仲間の「悪魔」が増えていく内に、どこかへ消えてしまったのです。その後その「悪魔」の行方は不明。いつの間にかその「悪魔」は存在を忘れ去られてしまいました。

上記のように、「悪魔」という存在については色々と設定があるのですが、『Brudeid』に登場する悪魔はまったく違った形に変化しています。そのため、実を言うと『Wanted.』の設定諸々を知っている必要は一切ないのですが……折角の資料集なので記載しておくことにしました。

Word

【悪魔】

ダニエルを唆し、ガブリエラを蘇らせたこの物語の元凶たる存在。本作では深く描くことはなく、その存在を仄めかす程度で終わっています。この「悪魔」は概念や比喩などではなく、実際に存在しています。死人を蘇らせる能力というよりは、「命と引き換えにその人間の望みを叶える」能力を持ち、しかしそれは人間の為に行っていることではなく、「自分の娯楽」として愉しんでいるだけです。自分の愉しみのために人間の命を弄び、遠くから眺めて嘲笑っています。上記で『ファウスト』から着想を得たというようなことを書きましたが、作品に登場する「悪魔」はこの『ファウスト』に登場する悪魔をざっくり解釈して、「面白がって人間たちの心を弄び、振り回す」存在、としています。

『Brudied』という作品が属する世界には、この「悪魔」に向かって「誓う」と「誓った人間の命を代償にして、願いを叶えてもらえる」というような仕組みが存在します。(詳しくは【誓い】の欄にて記述。)

作品が属する世界観の中での「悪魔」という存在については、上記【『Wanted.』について】の欄で説明した通りです。

【兄と弟】

当作品において、「兄」は守り助ける存在、「弟」は守られ助けられる存在として役割をはっきり分けて書いています。作中で呼び方が変わるシーンがいくつかありますが、「兄ちゃん」→「アル」などそれは兄弟の間の関係性が変化したことを表現しています。

物語の最後にエドガーがテオドールのことを「兄さん」から「テオ」と呼び変えているのは、自分がテオドールを守る、という決意の表れのようなものです。

【兄弟の誓い】

幼いアルベルトとテオドールが結んだ約束事のことです。父ダニエルは仕事で忙しいためにほとんど家におらず、母マーガレットは体を悪くしてほぼ寝たきり。当時はメイドのメアリがいなかったため、自分た

ちだけで生きていくしかない、と思ったアルベルトがテオドールに提案しました。「お互いを助け合って生きていく」という健気な誓いで、テオドールはこの誓いにアルベルトとの繋がりを見出し、縋っていました。

【誓い】

作中においては「各々のキャラクターが心に決めたこと」。本来の設定で言うと「願い」と「代償」両方を悪魔に伝える、即ち、「●●をする(願い)のために、命をかける(代償)」というような言葉を悪魔に伝えることを「誓い」といいます。「誓い」＝「悪魔との契約」のようなものです。「●●がしたい」だけでは誓ったことにならず、「代償を支払います」ということを明言しない限り、悪魔との間に「誓い」は成立しません。

この「誓い」の概念は、2007年頃から制作していた『唄。-Song Of oath-』という小説・ボイスドラマ作品のセルフオマージュです。オマージュ元においての「誓い」は「自分の命と引き換えに叶えたい願いを、その誓いを聞き届けてくれる”皇女”という存在に伝え、願いが叶ったら死亡し、”皇女”の力の一部となる」というような仕組みのもとに成り立っていました(該当作品は既に公開終了しています)。

今作、及びオマージュ元においての「誓い」は英語で言うところの”vow”や”resolution”ではなく、”oath”に近い意味を持ちます。”oath”は「誓い・誓約」という意味の他に「呪い」という意味も持っています。一種の呪いにも似た各々の願い、覚悟。それが今作のキー(真相)だったのです。

【炎】

何かを「明るみにする」、そして同時に「すべてを消し去り、終わらせる」ものとして登場させました。サブタイトルの由来「隠されていた各々の誓い(真相)が明かされていく」こと、そして「すべてが明かされたことによって物語が終わりを迎える」ということの暗喩です。

【女神】

少女＝ガブリエラのこと。ダニエルにとって、ガブリエラは美しくて神聖な、まさに女神のような存在でした。作中でダニエルが「神に自分は断罪させないし、ガブリエラは渡さない」という発言をしていますが、

彼はガブリエラを蘇らせたことで本来の神と決別し、以降はガブリエラを、自分を救った神（女神）として崇拝するようになります。本来の神は自分から妹・ガブリエラを奪い、絶望を与えたが、女神＝ガブリエラは自分に幸福を与えてくれた（＝絶望から救ってくれた）。だから、彼女こそが自分の神だ！ というようなぶっとんだ解釈です。彼を救ったのはガブリエラというよりも「悪魔」なのですが、彼にはガブリエラしか見えていないので……。

愛する「女神」のために生き、その全てを捧げることでできたダニエルは、この作品で唯一幸せになれた人物でしょうね。

【ロケットペンダント】

ロケットペンダント（英：Locket）とは、チャームが開閉式になっていて中に写真や薬などを入れられるようになっているペンダントのこと。

（Wikipedia より引用）

……ごく一般的なあのロケットペンダントです。今作では、＜持ち主の一番大切なもの＞を示すための小道具として登場させました。アルベルトにとっては「兄弟」、テオドールにとっては「死んだ母親（家族全員が一緒にいること）」、ダニエルにとっては「ガブリエラ（との幸せな時間）」というような感じです。全員大切なものが交わっていない、というも密かなポイントかもしれません。

Character

【アルベルト・ブラックマン】

性別：男 年齢：27歳

ブラックマン家の長男。寡黙で冷静、理知的な雰囲気があり、母親に似た金色に近いブロンドの髪と、ヴァイオレットの瞳をしている。家に起こった異変について何か知っているようだが、弟たちには一切説明せずに独断で行動するため、弟たちから反感と不安を持たれている。

元々は温厚で心優しく、家族とも仲が良かった。子どもらしく純真且つ真っ直ぐな心を持ち、父・ダニエルのことを尊敬し、慕ってもいた。しかし彼は、二十歳の誕生日にダニエルから「女神」＝ガブリエラの存在について聞かされる。ダニエルから告げられた「女神」の存在や、父親が妻（アルベルト、テオドールの母親）・マーガレットを愛していなかったこと、マーガレットの死はダニエルが原因であること、エドガーが腹違いの弟であること、しかもその母親が「女神」であること、自分たちを置いていずれ死ぬつもりであることなどを知り、ダニエルに嫌悪感を抱くようになった。折り合いが悪くなったのは丁度この二十歳の誕生日からである。

「女神」の存在を知らされ、ダニエルが死んでからのことを託されたアルベルトは、一人胸にその「女神」ガブリエラのことを抱え込み、父が死んだらすぐにでもあの「女神」を終わらせよう＝殺そう と心に決めていた。

そしてダニエルが死に、「鍵」（これは手帳の入っていたダニエルの書斎机の引き出しの鍵。）を渡されたアルベルトは再びガブリエラの元へ行き、弟たちが真実を知る前にすべてを終わらせるため、行動を開始。しかしダニエル死によって完全なる生を手に入れたガブリエラは、自分の息子であるエドガーの前に姿を現すようになる。そのためエドガーはガブリエラの存在に気づいてしまい、その結果テオドールも彼女のことを知ることになってしまった。それでも弟たちを巻き込みたくなかった彼は、どれだけ弟たちに責められようと何も言わず、常に一人で行動し続けた。だが何も説明しなかったことが、テオドールの足の負傷へと

繋がってしまったとも言える。

彼の目的はただ「弟たちが真実を知ってしまう前にガブリエラを殺害し、彼らを守ること」。幼い頃「弟たちは自分が守る」と誓ったこともあり、長男としてのゆるぎない信念を強く持っている。テオドールのことでもエドガーのことと同じくらい大切に想っているが、彼の性格のせいかなり伝わらない。それでも、端々の行動から弟たちを気遣い、愛していることはうかがえるので、ただ不器用なだけだと思われる。

ただ、エドガーについては少々複雑な感情も持ち合わせていた節がある。大切な弟ではあるが、この家を滅茶苦茶にしたダニエルと少女（ガブリエラ）との間の子である、という現実からか、アルベルトはエドガーとの接触を少し避けている部分もあった。どう接するべきなのか迷っていた、というのもあるだろう。

アルベルトが最期、弟たちと共に屋敷を出ずにあの場合に残ったのは、「ガブリエラへの同情心」と「どちらにしても自分は死ぬから」というのが理由。アルベルトはガブリエラを化物であると嫌悪し、母やメアリを殺害した絶対悪だと認識しているのと同時に、自分たちと同じく父・ダニエルの愚かな行為の被害者でもあると感じている。世間的には死んだ少女、ガブリエラ。心のよりどころにしていたダニエルはいずれ死ぬ。息子であるエドガーが彼女の傍にずっといることを選ぶなんてほぼあり得ない。「利己的で自己犠牲的、とても自分勝手」な行為に振り回され、結局孤独になってしまう少女に、アルベルトは同情心を寄せてしまった。また、父から「彼女のことを頼む」とまれていたこともあり、孤独に死んでいく彼女の最期に一緒にいることで、ブラックマン家の現当主として、そしてダニエルの息子として、彼女への贖罪になると考えたのだろう。

同時に彼が当主としての任から解放たことも意味している。アルベルトは自分だけしか知らない秘密（少女の存在のこと、またそれにまつわること）を七年間ずっと抱えて生きてきて、苦しんでいた。その苦しみから、彼は解放されたのだ。

また、実は彼も「悪魔」に「誓い」をたてていた。幼い頃、「僕は僕の大切な人を、命に変えても守り抜く。何があっても」ということを言うが、この時すでに「悪魔」に興味を持たれており、メアリの死亡後、メアリの部屋で「弟たちのことを命に変えても守る」といっ

た趣旨の発言をした後、彼の目の前に「悪魔」が現れた。彼の「誓い」は、彼が何度も言っている通り、「弟たちを守る（救う、助ける）ために、この命を差し出す」。物語の最後、テオドールとエドガーが無事逃げ出したことで「誓い」は果たされた。そのため彼はその後、ガブリエラの目の前で死亡する。

つまり、もしあの場から三人で逃げ出したとしても、その後すぐにアルベルトが死亡することは確定していたのである。それが分かっていたからアルベルトはあの場に残ったのだ。心から憎んだ父と同じ愚かな行為で命を落とした彼は、「利己的で自己犠牲的、自分勝手」な幸福に満ちた状態で死ねたのだろうか。

ちなみに……彼には上記【ストーリーについて】で触れたように「物語を終わらせる」という役割があるが、彼の手によって「物語が終わった」ことを分かりやすく表現するために、彼にあそこで死を選ばせた、という裏設定（と言う名の大人の事情）。

【テオドール・ブラックマン】

性別：男 年齢：25歳

ブラックマン家の次男。純粋で真っ直ぐな青年で、死んだ母・マーガレットによく似た面立ちをしている。メイドのメアリを含めたブラックマン一家を心から愛しており、家族全員で仲良く平和に暮らすことを望んでいる。ロケットペンダントに母親の写真をいれることで、間接的に家族全員で暮らしている感覚を一人味わっていた。

幼い頃に母親を失ったのがトラウマになっているのか、家族を失うことに異常なまでに恐怖を感じている。段々弱っていく母親を間近で見続けていたからかもしれない。そんな時でもずっと傍にいて、辛い時や寂しい時に自分を支えてくれていたアルベルトに対して深い信頼と愛情を寄せており、彼と結んだ「兄弟の誓い」を自分とアルベルトがずっと一緒にいるための約束だとして強く依存している。アルベルトが自分の知らないことを知っていて、自分のいないところで動こうとしていることを不安がっていたのはそのため。彼に頼られない＝彼と共にいられなくなるのでは？ という焦りがあったようだ。彼はアルベルトに強く依存しているのである。

そんな依存心の強いテオドールだが、弟のエドガーの存在がその依存心を少しだけ緩和しているとも言える。テオドールは、エドガーに対してアルベルトが自分にしてくれたように愛情深く接し、彼を支えることで、エドガーとの繋がりを見出していた。それまではずっとアルベルトただ一人に集中していた依存心が、エドガーにも向けられたことで、アルベルトが死んでしまった後もギリギリ自我を保っていられたといえる。基本的にかんりの（無自覚な）依存体質で、何かに依存していないと（心の拠り所がないと）生きていけないタイプ。

彼は兄弟の中で唯一、ブラックマン家で起きた事件の顛末にほぼかわりのない人間で、わけがわからぬまま異変に巻き込まれ、わけのわからぬまま兄アルベルトを失ってしまった。母・マーガレットに似ているだけでガブリエラに何度も殺されそうになり、命は助かったものの足を負傷し、その後も安静にせず行動し続けたせいで、物語の最後には完全に歩けなくなってしまった。かなり不憫で理不尽な目に合ってい

る。

彼の目的（願い）は「家族みんなと一緒に過ごすこと」。アルベルトとの「兄弟の誓い」を通じた繋がり、自分が守るべき存在である大切な弟、エドガーとの繋がり、この家に愛情深く仕え、幼い頃から世話をしてくれたメアリとの繋がり、尊敬し、憧れている父との繋がり、死んでしまったが、写真をペンダントに入れて持ち運ぶことで見出した母との繋がり……これら「家族」との繋がりを断ち切らないために、彼は行動し続けた。しかし結局そのほとんどの繋がりは断ち切れてしまった。

すべてが終わった後、今度はアルベルトが残してくれたペンダントに依存しているが、エドガーと新しい「兄弟の誓い」を結んだ後（本編で言うところの「誓いのキスでもする？」のあたり）、その手からペンダントを取り落としてしまう。これは、テオドールが最後に呟いた「ずっと一緒だ」という、彼の最初から最後まで一貫してぶれなかった願いが、もう兄弟三人揃った状態では叶えることができないこと、またテオドールの中からその願いが消え去ってしまった（諦めてしまった）ことの暗喩。テオドールは「誓い」をたてていないこともあり、彼の願いが叶うことはあり得ないのである。

上記用語解説の【兄と弟】欄にて解説した通り、アルベルトとの関係性は物語が進むにつれて変化している。幼い頃は「兄ちゃん」と呼んでいたが、「兄弟の誓い」をたてた際に「アル」呼びに変化している。これは、アルベルトに守られる「弟」としての立場から、肩を並べて一緒に歩んでいける存在、対等な存在に変化した（かった）ために「アル」という名前前で呼ぶようになった ということを表す。最後にまた「兄さん」呼びに戻っているのは、対等であったはずだが、テオドールは結局アルベルトの「弟」（＝ただ守られるだけの存在）でしかなかった、共に歩むことは許されず、置いていかれる運命の元にあった……ということを表している。

余談だが……テオドールは元々22歳の設定で書いていたのだが、諸事情によって台本が書き終わったあとで25歳に変更された。そのため、言動が25歳の割に少し幼いところがある。

【エドガー・ブラックマン】

性別：男 年齢：16歳

ブラックマン家の三男。健気で優しい性格で、どことなく儂げな雰囲気がある。三兄弟の中で唯一黒い髪に青い瞳をしていて、そのせいか兄たちとあまり似ていないことが密かな不満。年齢の割に見た目が幼く、言動は落ち着いていて大人びている。

兄たちを心から慕っていて、特にお茶をしたりどこかへ出かけたりと、一緒にいる時間が多いテオドールには深い愛情を寄せている。そのため、彼が傷ついたり危険な目にあったりするのを嫌がり、できる限り彼を異変から遠ざけようとしていた。

作中で明かされる通り、彼は兄たちと母親が違う。母親は家に異変を起こした張本人である少女＝ガブリエラ。容姿もガブリエラに良く似ている。「女神」として蘇らせられたガブリエラと、ダニエルの間でできた子どもであるため、「女神」の血が半分流れているということになる。しかし彼自身にはガブリエラが持っているような不思議な力はなく、今のところはいたって普通の人間の少年である。ガブリエラが「あなたはちゃんと”人間”でいてくれてうれしい」と言ったのはそれが理由。ガブリエラは自分自身が「女神」として蘇ったことを決して喜んではいないため、息子のエドガーが同じようになることを恐れていた。物語中に起きた異変のほとんどは主に彼の存在が原因と言っても過言ではない（とても理不尽ではあるが）。

真実に気づいてからはテオドールのためにも自分だけが犠牲（ガブリエラの傍に行くこと。あの時点ではガブリエラの思惑がはっきりとは分かっていたこともあり、エドガーがガブリエラの元に行けばなんとかなると考えていた）になり、自ら危険に赴くアルベルトのことも助けようとしたが、テオドールにそれを拒まれる。

彼の目的は「兄、テオドールが傷つかないようにすること」、作品の中盤～終盤にかけては「テオドールを守ること」。彼の行動は常にテオドールが中心で、彼が酷い目にあわなければひとまずはそれでいい、と考えている。それほどまでにテオドールのことを慕う理由は不明だが、母ガブリエラが一番憎む女性、マーガレットによく似た面立ちのテオドールのことを愛するというのは皮肉なものである。もしかしたら、「だからこそ」なのかもしれない。

物語の最後、テオドールと一緒に生き残った彼は、テオドールと一緒に生きていく事を決意。「何があっても”二人で”生きる」という新たな「兄弟の誓い」をたてる。これは、アルベルトの（個人的な）誓い、「命に変えても弟たちを守る」とは同じようで少し違う。アルベルトは自分一人だけが犠牲になることで弟を守ろうとしていたが、エドガーは常に共にいることでテオドールを物理的だけではなく精神的にも守ることにしたのだ。物語が終わった後、テオドールとエドガーは共依存のような関係性を築いて生きていくことになるだろう。その関係性が築かれたことによって、二人の生活が良い方向へ行くのか、悪い方向へ行くのか、それは分からないが……。

最後、テオドールの呼び方が「テオ兄さん」から「テオ」に変化しているのは、上記【兄と弟】で説明した通り。「弟」という兄からただ守ってもらうだけの立場から、彼を守れる立場、あるいは彼と肩を並べて共に歩む立場になるために、「テオドールを守る」という決意も込めて名前呼びに変化した。

またも余談ではあるが……

エドガーとテオドールの関係性は、母・ガブリエラとその兄（そして父）ダニエルの関係性と意図的に似通ったものにしてある。

これは要するに、エドガーはテオドールに「兄」という以上の愛情を抱いているということの比喻ではあるのだが、その愛情がどの程度のものなのかは各自のご想像におまかせする……。

【少女・ガブリエラ】

性別：女 年齢：17歳（死亡時）

ブラックマン家に異変を起こした張本人。常に黒いドレスを身にまとい、突然現れて突然消える、神出鬼没の存在。どことなく耽美で艶めかしい雰囲気纏った、黒い髪と青い瞳をした美少女。

その正体はブラックマン家の当主、ダニエルの実妹……であったはずのもの。

ダニエルとガブリエラは実の兄妹でありながら恋愛関係にあった。生前病弱だった彼女は、いずれ死にゆく分かっている人生でも、ダニエルと共に過ごせる日々が幸せでたまらなかった。最終的に病で命を落とすも、「悪魔」の力によって、ダニエルの命と引き換えに蘇ることになる。ダニエルの生気が少しずつガブリエラのほうへと移っていくゆっくりとした蘇り方であったため、彼が死ぬまでの間は共に過ごすことができている。その途中にエドガーが生まれたのである。

生前、ダニエルが結婚した際は「兄妹だから仕方がない」と思って諦めていた。しかし、蘇った後は嫉妬心が爆発。「悪魔」の力を介したためか手に入れてしまった能力とダニエルの生気を与えられている影響でその能力が強化されたことで、ダニエルの妻となったマーガレットからも生気を奪うという行為ができるようになり、彼女を殺害した（マーガレットが段々と弱っていったのはこのため）。マーガレット殺害の際はまだ力があまり無い状態だったため、ゆっくりと弱らせて殺していくことしかできなかったが、ダニエルの死後、メアリを殺害する際に一思いに殺害できたのは力が完全なものとなっていたから（それなのにメア리를弱らせるだけで生かしていたのは、テオドールを彼女の手で始末させるため）。

このことから分かる通り、非常に嫉妬深く、独占欲が強い。また、かなり残忍な性格であることもうかがえる。生前は「私のかわりに幸せになってほしい」と願うほどに健気で純真な愛をダニエルに向けていたが、決してガブリエラが望んだわけではないのに彼女を蘇らせ、それなのに他の女に手を出した、となればさすがの彼女も腹をたてるだろう（それが恋愛感情からではなかったとしても）。

しかしブラックマン家に異変を起こしたこの「少女」は、実は「ダニエルの妹・ガブリエラ」とは似て非なる存在であった。彼女は「悪魔の力」とダニエルの記

憶にあるガブリエラの情報（容姿や性格など）によって構築された、ガブリエラの見た目をした別の存在。記憶などは引き継いでいるが、少女はダニエルの妹、ガブリエラ本人とは言えないのであった。作中の少女は【蘇った人間】ではなく、【「悪魔の力」によって生み出された限りなく悪魔に近い存在】なのである。彼女の中には「悪魔の力によって蘇った少女・ガブリエラ」の人格と、「ダニエルの実妹である人間のガブリエラ」に関する記憶から生まれた人格の2つが存在している。

中庭にガブリエラの遺体が埋まっていることが発覚するシーンは、作中で活動しているあのガブリエラの肉体と、人間のガブリエラ（＝ダニエルの妹）の肉体が別物であることを表現している。つまり、人間のガブリエラの肉体は死んだままなのである。残忍な性格になったのは、「悪魔」に近い存在だったから、と考えられる。（元々少し過激な部分はあったのかもしれないが。）

ダニエルが死んだ（＝ダニエルの生気すべてがガブリエラのほうへと渡った）こと、また本来は奪う必要のなかったマーガレットの生気も奪ったことにより、想定していた以上の力を得て「完全な悪魔」となった彼女は屋敷の中の状況を自らの力で調べ、知れるようになった。その結果いずれ再び訪れるであろうアルベルトが自分を殺そうとしていることに気づき、ならばせめてその前に、息子であるエドガーを一度でいいから腕に抱きたいと思うようになる。彼をなんとか自分の元へ連れてこようとあの手この手を尽くし、それがブラックマン家の異変の原因となった。エドガーの傍にずっといるテオドールや、エドガーが母親みたいだと言ったメアリに対して深く嫉妬し、彼らを「邪魔もの」としてその命を奪おうとした。メアリの生気を奪って彼女を操り、一緒にテオドールも殺害しようとしたがアルベルトによって阻止される。後に自らの力でテオドールを殺そうとするも、エドガーから涙ながらに「やめて」と懇願され、彼女の中の母性が動いたのか、あるいは人間のガブリエラの優しい人格が反応したためか、テオドール殺害をやめる。

アルベルトに関しては、面立ちと、その利己的で自己犠牲的な態度からダニエルを感じ取り、恋愛まではいかなくとも特別な感情を抱いていた。そのため、マーガレットとダニエルの子どもではあるが、テオドール

ルに対して抱いていたような殺意は持っていない。

彼女の目的は「エドガーをその腕に抱くこと」。エドガーが生まれてすぐは、まだ完全には生気が戻ってなかったこともあり、お産だけで疲れ果ててしまっていて、エドガーを抱くことが叶わなかった。母として、そしてダニエルの正式な「妻」であるという証として、自分の子どもであるエドガーをその腕に抱いてあげたかったのだろう。彼女は「エドガーの母親」(＝ダニエルの妻)であることに固執しているのだ。蘇った瞬間からもう人間ではなく「悪魔」であった彼女にとって、唯一の存在意義はダニエルの最愛の人であり続けることだった。もしかしたら、「ダニエルの妹である本来のガブリエラ」にすら嫉妬していたのかもしれない。彼が求める「ガブリエラ」とは違うことにずっと苦しみ続けた悪魔の少女ガブリエラは、人間のガブリエラと同じくダニエルに想いを寄せていた。

人間のガブリエラは「自分の死後、ダニエルに幸せになってほしい。そしてもし生まれ変わったらまた一緒になりたい」と願っていた。悪魔のガブリエラも同じ願いを抱いていただろう。しかし「悪魔」となってしまった彼女は、ブラックマン家が燃え尽きても死ぬことを許されず、一人屋敷の焼け跡で悲しく笑うのだった……。

【メアリ】

性別：女 年齢：26歳

ブラックマン家に仕えるメイド。本名は「メアリ・カールトン」と言う。献身的で、アルベルト達やダニエルに対して深い愛情をもって接する。紅茶に詳しく、料理上手。

元はイギリスのそれなりに名のある貴族の生まれだったが没落し、貧民街で身売りをして暮らしていた。そんなところをダニエルに救われ、以降、彼に恩を返すためにと甲斐甲斐しく働いている。

生まれが貴族である為か、どこことなく気品を感じさせる振る舞いをする。また顔立ちも美しく、ダニエル曰く「タンザナイトのような深い青の瞳をしている」とのこと。この瞳の色にダニエルは惹かれた。

非常に慈愛に満ちた女性で、兄弟たちにとっても優しく親切に接してくれる。また、しっかりとした意志の強さも持っている。

青い瞳が理由で家に連れてこられたことをガブリエラが知ってしまい、嫉妬の対象となる。真夜中の廊下で突然襲われ、一気に生気を吸い取られて衰弱。かなり強い力を手に入れつつあったガブリエラに操られ、テオドールを殺害しかけるがアルベルトによって阻止される。意識を取り戻すも、テオドール殺害を為せなかったことでガブリエラから用済みとされ、殺害された。

尚、彼女も「誓い」をたてていた節がある。「生涯をかけてブラックマン家に仕える」というような発言を度々するが、これは「誓い」に該当しているとも考えられる。ただ、「悪魔」「誓い」両方に関係なく彼女はガブリエラの手によって殺害されてしまうので、真偽のほどは不明。

【ダニエル・ブラックマン】

性別：男 年齢：52歳

ブラックマン家の当主で、ある意味ブラックマン家で起きた異変の元凶。有名な民俗学者で、主に呪術を研究していた。あちこちへ現地調査に行く傍ら、大学で講義を行ったり、依頼があれば講演会なども開いたりしていた。非常に多忙で家にいないことが多かったが、息子たちにはきちんと愛情を注いでおり、子どもたちからも慕われていた。

彼は実妹であるガブリエラと恋愛関係にあった。当時は彼女の身体が弱かったこともあり、精神的な繋がりの関係だった。ガブリエラが死に、絶望の底にいたときに出会った「悪魔」に唆され、命と引き換えに彼女を蘇らせることを決意。そうしてガブリエラ＝少女を蘇らせた後は肉体関係を持つようになり、エドガーをもうける。

彼が青い瞳に惹かれるのは、当然ガブリエラが青い瞳をしているからである。妻・マーガレットに関しては彼女の青い瞳にガブリエラの瞳を重ね、実の妹であるガブリエラへの恋心を捨て去るため（忘れるため）、「身代わり」として結婚することにした。しかし結局ガブリエラへの恋心を抑えきれず、後にガブリエラと恋仲になる。マーガレットへは女性として、妻としての愛情を最初から最後まで一切感じていなかった。そのため悪魔に唆されてガブリエラを蘇らせた後、彼女の手によってマーガレットが殺害されても悲しみに沈むようなことはなかった。ただ、一応申し訳ないという気持ちはあるらしい。しかし青い瞳に惹かれてメア리를家に連れ帰るなど、全く懲りていないようだ。

非常に利己的で自己犠牲的、とガブリエラに評される通り、「自分が良ければそれでいい、自分が良いと思うことは何をしてでも貫く」タイプ。本人に悪気はなく、ただ「ガブリエラを蘇らせた」「青い瞳にガブリエラを感じたから結婚したい」「青い瞳に惹かれたので家に連れて帰ってやろう」という考えだけで動き、それが後々どんな結果になるかは深く考えていない。故に、メア리를呼ぶことでどうなるか、に関しては本当に何も考えていなかったのかもしれない。ガブリエラが嫉妬するのを喜んでいたのかもしれないが……。どちらにせよ、結局彼のせいで、命を救ったはずのメアリは命を落とすことになってしまった。

尚、ダニエルは作中の少女が「実妹のガブリエラ」

とは少し違う存在である、ということに気づいていた。ガブリエラの見ただ目をしていれば、それはガブリエラである、と自分の中で折り合いをつけていたのだろう。

【マーガレット・ブラックマン】

性別：女 年齢：(故) 38 歳

アルベルトとテオドールの母親。女優のように美しく、とても優しい人だったらしい。ボウマー家という伯爵家の出身で、かなりのお嬢様だった。

21歳の頃にダニエルと出会い恋に落ちる。だが、伯爵令嬢がただの民俗学者と結婚するなど許してもらえないはずがなく、ダニエルと駆け落ちをした。マーガレットは心からダニエルを愛していたのだが、ダニエルはマーガレットのことを一切愛していなかった。とても不遇な女性である。最期は、蘇ったガブリエラの手によって殺害された。

Time Line

※「時間」は物語進行中を基準に計算しています。

時間	出来事	備考
物語開始前		
52年前	・ダニエル誕生	
43年前	・ガブリエラ誕生	
30年前	・ダニエル、マーガレットと結婚	
29年前	・ダニエルとガブリエラ、互いへの愛を認める	
27年前	・アルベルト誕生	
26年前	・ガブリエラ死亡（17歳） ダニエル、【悪魔】に【誓い】をたてる ガブリエラ（悪魔）誕生 ・ブラックマン家（物語の舞台）へ引っ越し	
25年前	・テオドール誕生	
20年前	・マーガレット倒れる	
18年前	・アルベルトとテオドールが【兄弟の誓い】をたてる アルベルト、【悪魔】に興味をもたれる	
16年前	・エドガー誕生	
14年前	・マーガレット死亡	
13年前	・メアリがブラックマン家へやってくる	
7年前	・ダニエル、アルベルトにガブリエラの事を伝える	
前日	・ダニエル、アルベルトに「ヒント」を与える ・アルベルト、ダニエルの手帳を発見する	
物語進行中		
1日目 朝	・ダニエルの失踪（死亡） ・少女、行動を開始 ・エドガー、不思議な声と少女の存在に気づく ・アルベルト、一つ目の鍵を入手	Chapter00～02
1日目 昼	・少女（ガブリエラ）、メアリの存在に気づく	Chapter02
1日目 夜	・メアリ、少女に憑りつかれる	Chapter03
2日目 朝	・三兄弟、メアリの異変に気づく	Chapter03～04
2日目 夜	・少女に操られたメアリによってテオドール負傷 ・メアリ、少女に殺害される ・アルベルト、【悪魔】と【誓い】をたてる	Chapter04
3日目 朝	・テオドールとエドガー、少女の言葉から【扉】と【鍵】 についての情報を入手、調査開始 ・アルベルト、2つ目の鍵に関する情報を入手	Chapter05

時間	出来事	備考
3日目 昼	<ul style="list-style-type: none"> ・テオドールとエドガー、【扉】の元へ エドガー、自分の正体について疑惑を持つ ・アルベルト、2つ目の鍵を入手 ・テオドールとエドガー、ダニエルの書斎でロケットペンダントを発見 ・エドガー、自分の正体への疑惑が確信にかわる 	Chapter06
3日目 夜	<ul style="list-style-type: none"> ・アルベルト、【扉】の鍵を開ける ガブリエラと再会する ・エドガー、テオドールへの想いを自覚 彼を守ることを誓う ・テオドールとエドガー、調査再開 ・テオドールとエドガー、【扉】の向こうへ 	Chapter06~07 ※ここでの誓いは悪魔との間にたてる【誓い】ではない
3日目 深夜 ～ 4日目 早朝	<ul style="list-style-type: none"> ・真相が明かされる ・アルベルト、死亡 ガブリエラとテオドール、エドガーは生還 	Chapter08~09
数週間後	<ul style="list-style-type: none"> ・テオドールとエドガー、新しい家での生活を開始 兄を失ったテオドールは半廃人化 	Chapter10
物語終了後		
～数カ月後	<ul style="list-style-type: none"> ・エドガー、テオドールのために働き始める ・【悪魔】、ガブリエラに接触 自分の仲間にならないかと話を持ち掛けるが、ガブリエラは拒否。その後数カ月にわたって交渉を重ねるも拒否され続ける 	COMING SOON...
1年後	<ul style="list-style-type: none"> ・【悪魔】、■■■のためにテオドールに接触 ・エドガー、テオドールと【悪魔】の接触に気づく ・エドガー、■■■を■■■ために行動する ■■■、■■■。■■■・・・・ ・ガブリエラ、エドガーを■■■ため■■■する ・テオドール、■■■。 	